

殺刃鬼と食人鬼の戯言話

春夏冬 秋人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

食人鬼と殺刃鬼。この二つの違いは『食べるか』『食べないか』さらに言うなら『生きるための人を殺す』か『生きているから人を殺す』か。同じようできて決定的にすれ違ってるこの二人が出遭ったらどうなるか。

それはきつとこんな戯言。

※小説家になろう、pixiv、カクヨムにも投稿しています。

目次

殺刃鬼と食人鬼の戯言話

殺刃鬼と食人鬼の戯言話

とある日。そろそろ秋が過ぎ去り紅葉がすべて落ちようとしてる
秋と冬の狭間の曖昧な季節の夜。

クチ、クチャ、グチャ。

人を聞くだけで不安に駆り立て掻き巻く不快な音夜の隙間に鳴り響く。

それは『何か』を租借する音。

「お兄さんも食べたいの?」

——人を食べる音。

まるで赤い皿のように広がった血の上に座り人食べるその女性は
食事風景を眺めている男に向けてそう言った。

男は黒い髪は短く目つきが悪い、着ている物も黒一色ということも
あつて夜中に遭ったら踵返すくらいには不審者だ。とはいえ現行犯
には劣るだろうが。

「遠慮するぜ。食ったら戻れなくなりそうだ」

まったくやめてほしいね。俺は鬼は鬼でも殺す鬼で食べる鬼じゃない。
ない。

「あらら、残念おいしいのに」

そういつてちぎった腕をまた一口噛み千切る。

「……ん。食べたいんじゃないなら、お兄さんはなんでさつきから
ずっとこつち見てるの? てつきりお仲間だから見てると思つたの
に。とかいかいつまで観てるの? ずっと見られてるとなんか食欲
沸いてくるんだけど」

「まあある意味仲間つちや仲間だな。まあそれはいいとして、何故見
てるかつて? 興味本位」

というか見られて食欲が沸くってどういうことだよ、普通逆だろ。
だよねーなんでだろ? あれだきつとおまえ見られて興奮する類の変
態なんだ。なんだとー! あ、でもお姉さんたしかに目立ちたがりか
も。ほらみる変態。

そんな風に会話する鬼二人。血の食卓で交わされる会話にしては普通すぎるが、ソレが絶妙に不気味にさせる。

正に鬼にはぴったりの食卓だろう。

「でもお兄さん変わってるねー、私の食事をそんな普通に見てられる人は初めてだよ」

「そうか？ ……まあたしかにグロイからな。俺はグロゲーも普通にやってるから平気なんだよきつと」

「そういう問題じゃないと思うよ」

苦笑する顔は実にかわいい。ただし血が滴っていないければ。

どこのB級ホラーだ。

「……お兄さんもしかしてデザート食べてほしいの？」

「なんでそうなる」

「だって興味本位なんでしょ？ 食べられてみたいのかと思って。

……お姉さんが食べてあげようか？ チェリーくん？」

「あんたの容姿なら食ってくださいって言うやつけっこう居るんじゃないか？ 俺はごめんだが」

茶色いセミロングに目大きい整った顔立ち、控えめながらもバランスのいい体系はセーター上からでも分り、むしろ世のサ克蘭ボ達が食べてくださいと自ら口に飛び込みそうなくらいには美人な女性。

ただし血が滴っていないければ。

因みに歳はだいたい二十歳くらいだろうか？ 正にエロいオネーさん、男の子の夢の存在。

ただし血が滴っていないければ。これでは悪夢だ。

「そうなの？ ……こんどチェリー狩りでもしようかな」

まったく物騒な話である。

痴女というより血女だ、美人なだけに性質が悪い。

そしてそんな会話をしている間にも食事は進みついにはその大きくは無い胃袋に人一人分の肉が収まった。

「ご馳走様。じゃあお姉さんそろそろ行くね？ またねお兄さん」

美しき食人鬼はそう言つて、赤い食卓から立ち上がり自室に帰るが如く去って行った。

「さて俺もそろそろ行くかね。ここに居ても死体すらないし」

あとに残された殺刃鬼もその場を立ち去る。

路地裏に残るは何も乗っていない赤い赤い皿。あと数時間もすれば黒く不吉に滲むことだろう。

その夜死体は一名だと新聞に載った。

1

「やつほーお兄さん奇遇だね」

「何が奇遇だ後つけてたくせに」

「いやいやそんなこと無いよたまたま一緒だっただけだよ」

「方向が？」

「気持ち」

くだらねー。殺人鬼は夜の大通りに吐き棄てた。

車一つ通らず明かり一つ無い、死んで出ているような町を、夜空の月が看取るように淡く光っている。昼間多くの車や人が通るだけに、そのギャップは大いに人に恐怖を与える。だがしかし、鬼が相手ではそんな風景も好ましいだけで逆効果のようだが。

ともあれ鬼二人は並んで歩く。

「なはは」

「腹が黒いねー」

「そりゃあ、人を食ったようなやつだな」ってよく言われますから」

「あたりまえだろ」

食人鬼が人食わないで何を食えるというんだ。

「因みに俺は食えない奴だってよく言われる」

「ありやりや残念、相性バツチリじゃない」

「まったく同感、最高だね」

「でもさ相性バツチリって夢が広がるよね」

「広がるだけ広がって覚めたら霧散するけどな。戯言よりも価値が無いよ夢なんて、現実に落すことができないんだから」

「昨日も思ったけどお兄さんの話はあれだね、傷ついたゲームデイス

クミたいだね。つまりうまく読み込めないって事」

「壊れてるってるからな。そういやゲームといえば昼間に人生なんてゲームみたいなもんだって言ってた中学生がいたぜ？ どう思う」

「さすがゆとり、そこまで行くともうゲーム脳極まってるね。人生とゲームはぜんぜん違うのに」

「へえ、どこらへんが？」

「うん？ ……ほら、えっと……人生にはリセットボタンが無いじゃない？ やり直しはきかないところが違う！ もしくは……終わりが無いからじゃないかな」

「どっかで聞いたこと適当に言ったただけだろそれ」

「……………バレたか。じゃあお兄さんはどう思ってるの？」

「ゲームと人生の違いはリセットボタンでも終わりが無いことでもない。だいたいリセットも終わりも両方あるだろうが」

「そうかな？」

「そうだよ。違うところはロードができるかできないかだ。人生はやり直しができないんじゃないかって、引き返せないんだよ。引き返すようにロードができたら後悔が先に立つちまうだろ？ そのの違いだよ」

「うん……やっぱり読み込めない。じゃあさセーブはできるの？」

「カイバ先生に聞けば昨日の献立くらい教えてくれるぜ」

「……………お姉さんのカイバ先生教えてくれないんだけど？」

「データか媒体が破損してんだなきつと」

「うわひどい、私の頭は壊れてないよ！」

「どうだかねー」

人食う奴の頭がまともなわけがない、まあそれは人を殺す奴も同じだけだね。

「お兄さんって殺人鬼なんだよね？」

「ああそうだけど……たぶん違うよ」

「うん？」

「字が違う。今お前は人を殺す鬼で殺人鬼って言っただろうけど、人じゃ無くて刃だ」

「つまり殺刃鬼？ 刃物を殺すの？」

「刃物で殺すの」

或いは刃物が殺す。

「へー。ところで食人鬼おねえさんと殺人鬼おにいさんどっちマシかな？」

「どっちも同じくらい最悪。マシもなにも許すことができない罪だよ。どんな理由があろうと人殺しは最悪だ」

「お姉さんのは人殺しじゃなくて食事だけど？」

「食事つてのは『生きるための殺し』だろ？ 対象が人間ならソレは

『生きるための殺人』だ」

「なるほど……。じゃさ食人鬼おねえさんが『生きるための殺人』なら殺人鬼おにいさんは？

『殺人のために生きてる』の？」

「違うな。殺刃鬼おれは『生きてるから殺人をする』んだよ。つーかなんだこの質問は？ 自分より下を見たかったのか？ 安心しろ、人殺しは同列で皆最下位だよ」

「ん、知ってる」

それからしばらく二人は口を開くことなく歩いた。

また口を開いたのは大通りを逸れ裏路地に入ったところだった。

「ねえ、そろそろ殺人りょうりしないの？」

「あ？」

「お姉さんお腹空いちやった」

「いや、意味わからな——ああなるほどだからつけて来たのか」

「うん。昨日見ちゃったんだよね、お兄さんの殺人。あんなに美味しそうに殺して、解体バラして、揃えて、盛り付けて、料理ころされたところみちやったら我慢できないよ。食べたばかりだから残しちやったけど」
「なるほど。新聞の死体が見覚えのない感じに変わってたのはおまえの仕業か」

新聞には怪死体一つと行方不明者一名と出てた、どちらも殺人事件扱いだけれど。

「うんだからまた、食べたいなーって。まあ味は変わらないんだけどね。でも最近誰を食べてもどこかで食べたような味しかない。死体りょうりをお兄さんが作ると不思議と美味しく見えるんだよ」

三步二歩殺刃鬼の前に出て食人鬼は振り返り止まる。目を爛々と

輝かせエサを早く寄越せと鬼が笑っている。
だから――。

「――!? ああああ!?」

殺刃鬼はその刃を振るった。

片腕を切り飛ばしそのままお望みどおり解体してやろうとするが、
刃は空しく空を切った。

「――お兄さんいきなり何するの?」

視線の先脂汗と血を流しながらも笑顔の獲物が見える。

「いやなに、最近マンネリ気味だっけ言うおまえにおまえが今まで一
度も食べたことがない物を食べさせてやろうと思っただけ」

そう言っただけ足元にある料理を投げた。

くるくると血を巻きながら飛んでいき。

ソレは躊躇することなく。

齧り付いた。

鬼は自らの腕を租借し嚙下する。

「確かにこれは一度も食べたことないね」

「だろう? 遠慮すんな殺してやるぜ?」

「あはっ。それは……すっご……い……魅力的……んっ……だけど、
まだ遠慮する……よっ!」

殺刃鬼が距離を詰めようと一歩踏み出した瞬間、食人鬼は食べきつ
ていない腕を投げつけた。投げられた腕は真つ二つに切れ、血がカー
テンのように広がる。

「ありやいや逃げられた」

赤いカーテンを振り払ったその先にはもう誰も居なかった。

「はあはあ……」

町外れの倉庫街の中の一つに、食人鬼はいた。追ってこなかったのは気づいていたが万が一にでもまだ捕まるわけにはいかないため、此処まで逃げてきた。

「……ふふっあはは」

しかしその顔はとても逃げてきた者のそれには見えない。思わずといったように零れた笑い声、愛しげに自身の腕の断面を見るその表情は、愉悦が広がっていた。

「はあ……」

明らかに傷の痛みだけではない溜め息を吐きながら、先ほどのこと思い出す。

腕を切られ時、腕を食べた時のあの衝撃、あの快感！ 食人鬼は理解した、自身を食べるために私は生まれてきたと。

でも……だからこそまだ食べられない。もっと、もっと美味しく幸せに食べられる方法を私はあの時知ってしまった。だからまだ、この初恋にもつと浸って、もつと熟させて、いろんな人を食べてもう誰も食べたくなくなったその時に——初恋が実ったときに殺して解体してもらおうんだ。

ああ……、それはどれだけ気持ちいいのだろう……。さっきのぜんぜん熟していないこの果実の、理解したての摘み食いですらこれだけ気持ちよくて、これだけ幸せなのだ。なら……実った時のその味はきつと死ぬほど幸福に違いない。

「ふふふふ、待っててね。また戻ってくるから」

その夜、死体は0だった。